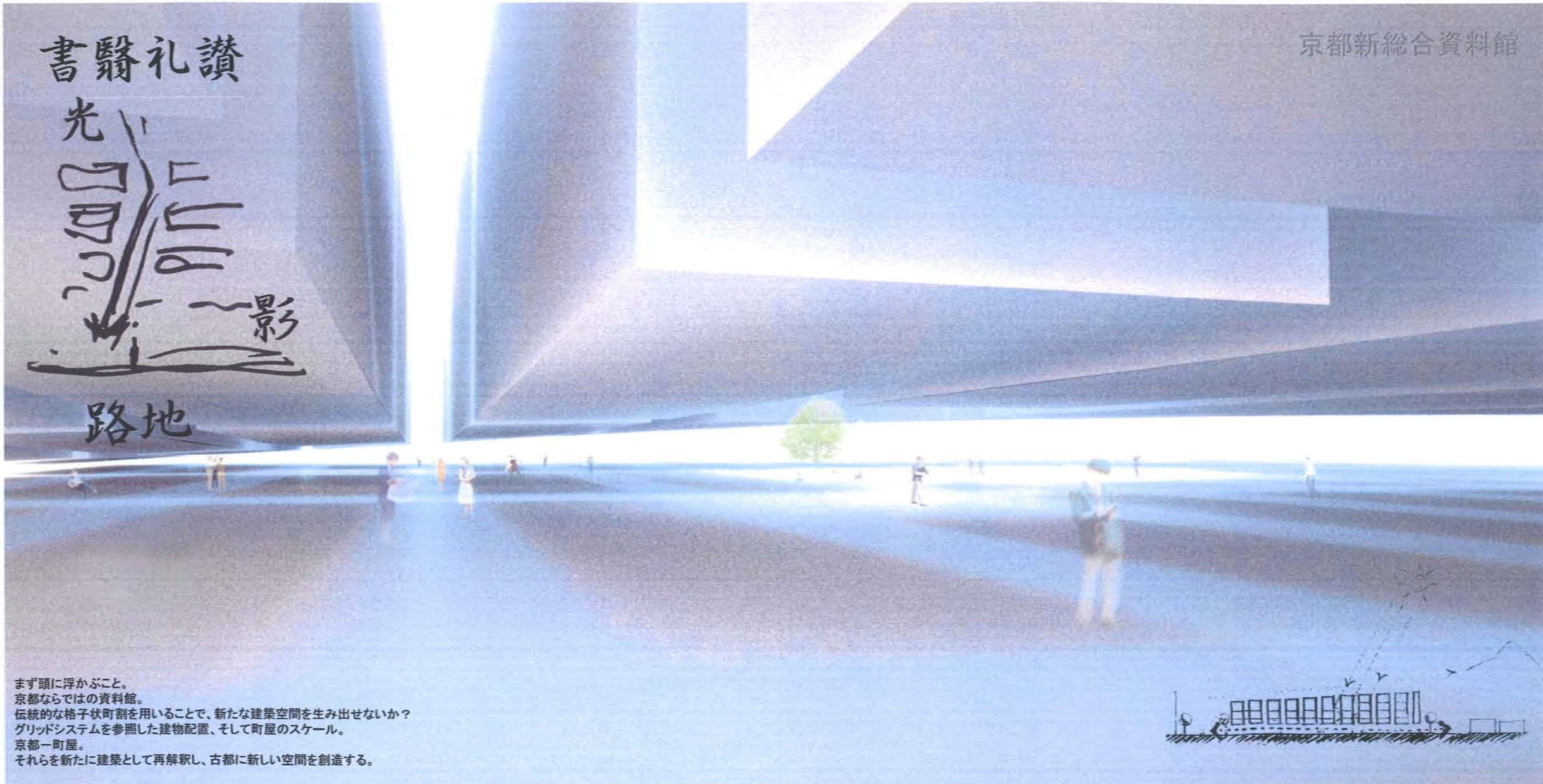
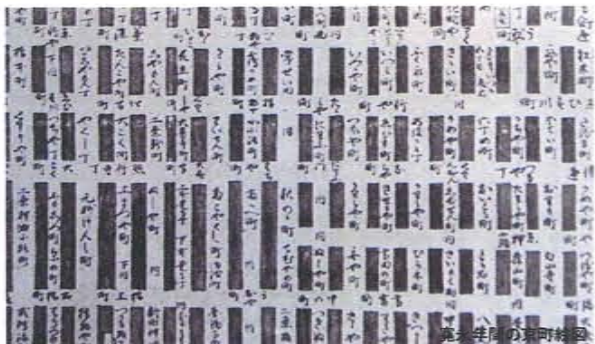


書翳礼讚

光
影
路地

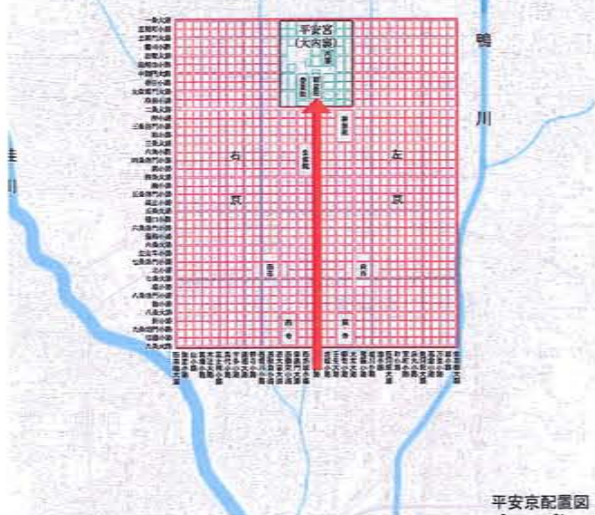


まず頭に浮かぶこと。
京都ならではの資料館。
伝統的な格子状町割を用いることで、新たな建築空間を生み出せないか？
グリッドシステムを参照した建物配置、そして町屋のスケール。
京都一町屋。
それらを新たに建築として再解釈し、古都に新しい空間を創造する。

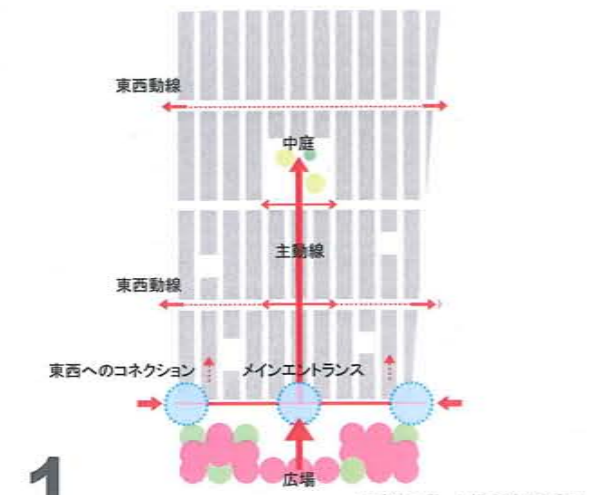


その起源を1200年以上前の平安京遷都に遡る京都のグリッドは、近世町屋においてもなお、その構造を留めている。
町屋のグリッドは、かつて市民のネットワークを形成し、その交点で人々は交流した。この京都の歴史でもある伝統的路地空間を新たに解釈し、建築空間として再定義する。
世界的にも名を馳せる京都。その伝統的グリッドを踏襲することで、この新総合資料館は、京都を世界に再発信することとなる。
町屋の平均的モジュールとして、5m×27mを採択、南北路地を2m、東西小路を3mと設定し、敷地にグリッドを展開する。
京都という歴史によって集積した書物。それらは隠されるのではなく、可視化され表象され、人々にその重みを誇示すべきである。それゆえ閉架書庫を始めとする収蔵庫は、町屋のモジュールから生成されたポリウムとして宙に持ち上げられ、建物全体のデザインへと昇華する。一方、開架書庫および閲覧スペースは1階レベルにオープンに展開する。上部に浮いたポリウム群は、内部空間に光と影のグリッドを映し出す。高さ16mの路地空間は、空からの自然光を柔かく地上に届け、要所要所に穿たれた庭は人々の温かな光溜まりの場を提供するだろう。

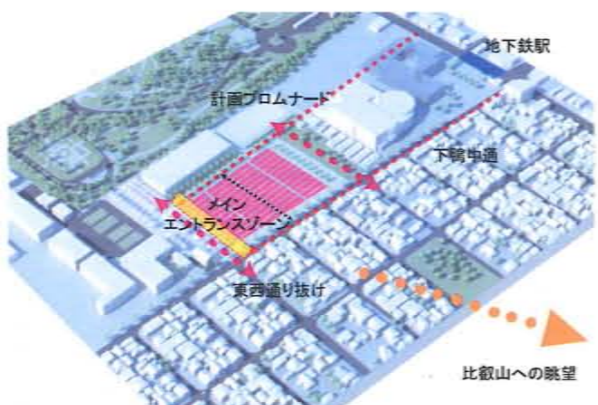
この資料館は京都という歴史の層が織りなす光と影の場である。



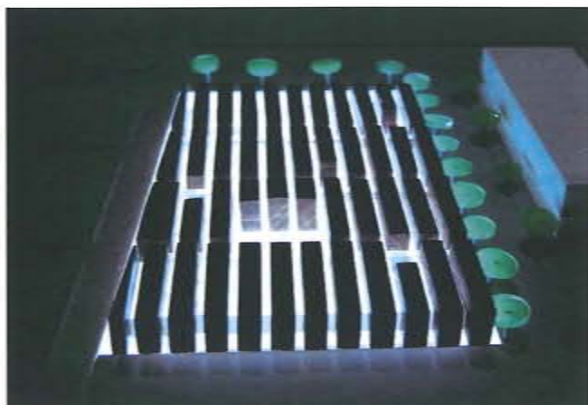
巨大な塊になりがちな公共建築物だが、町屋のモジュールに倣うことにより、近隣の住宅地のスケールに馴染みやすい分節されたボリュームを得ることができる。また木をあしらった外観は、間近で見れば親近感を覚え、全体としては新たな建築像として記憶に残るであろう。
ポリウム最大高さを18mに設定、さらに比叡山への景観等配慮しつつ、北西、南東角を18mに、北東、南西角を14mに下げ、ポリウム全体の屋根を曲面状にすることで、建物のアイデンティティを高めている。植物園側に立つと、下向きに緩やかに湾曲する屋根越しに比叡山が臨めるであろう。



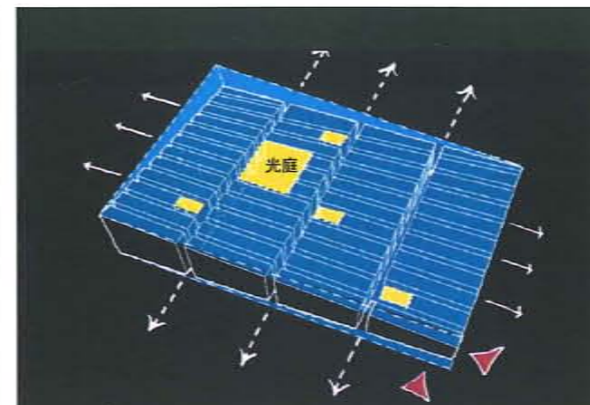
平安京に倣った構成ダイアグラム



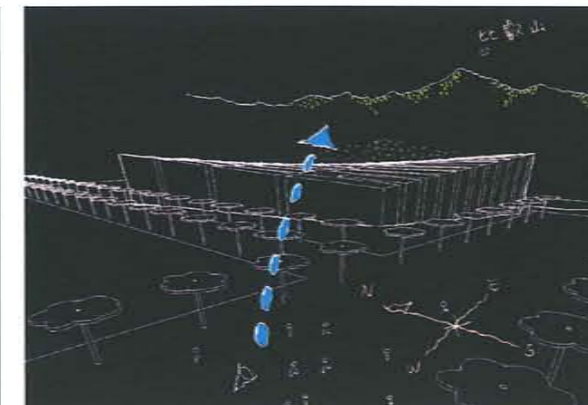
敷地のコンテクストに町屋のグリッドを適用する。



町屋のグリッドから浮かび上がる光の筋。



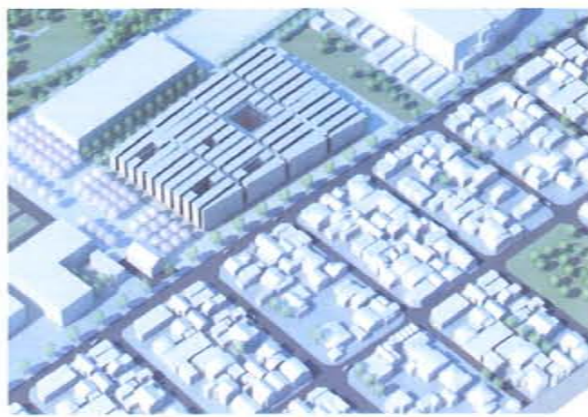
結節点に光庭を設け、溜まりを提供する。景観を配慮し、北東と南西のコーナーを下げる。



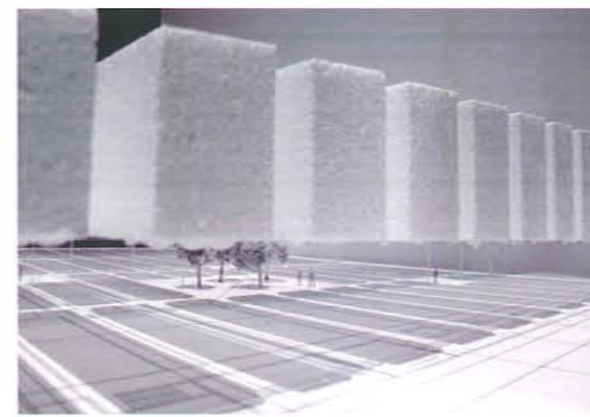
比叡山の景観を考慮する。



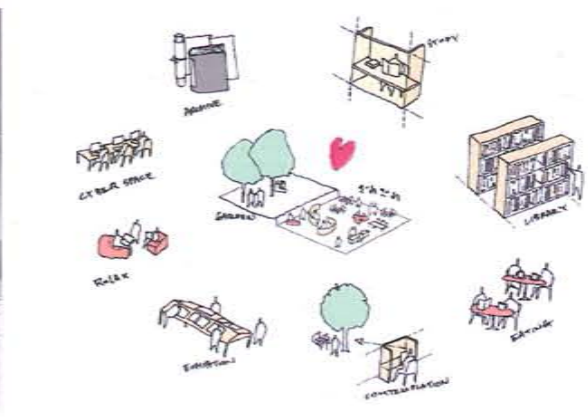
直方体の木箱群を柔かく変形する。



近隣住宅地を考慮したポリウム。

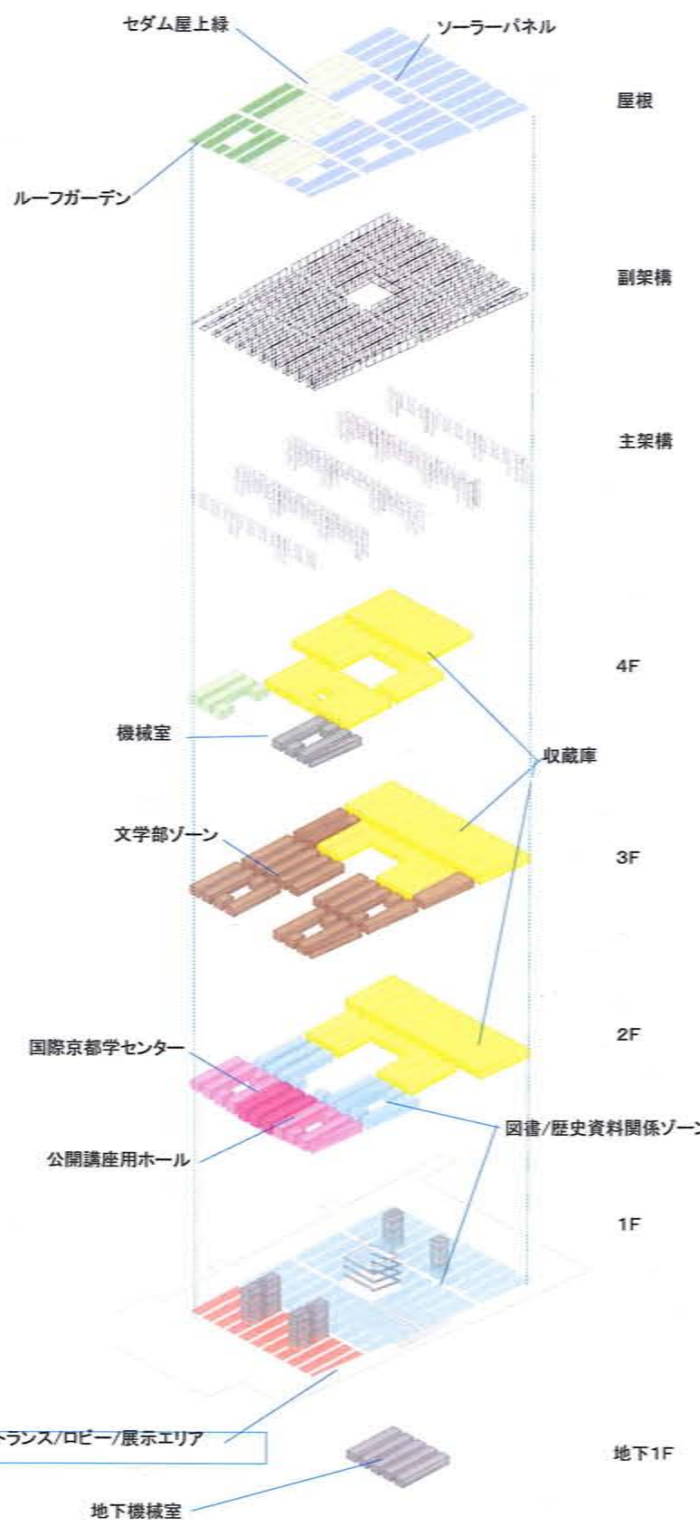
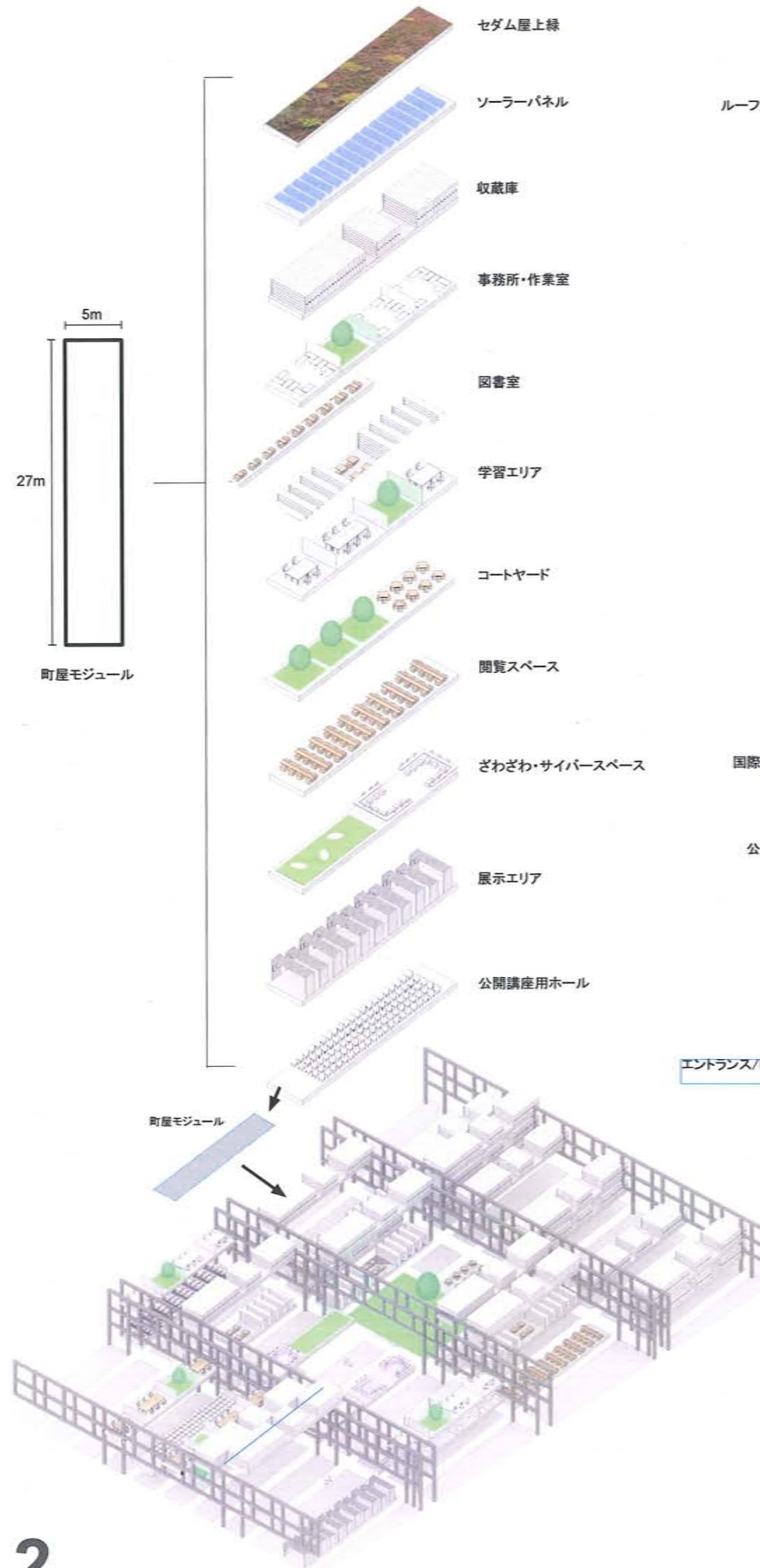


収蔵庫が地上に投影する光と影のグリッド。

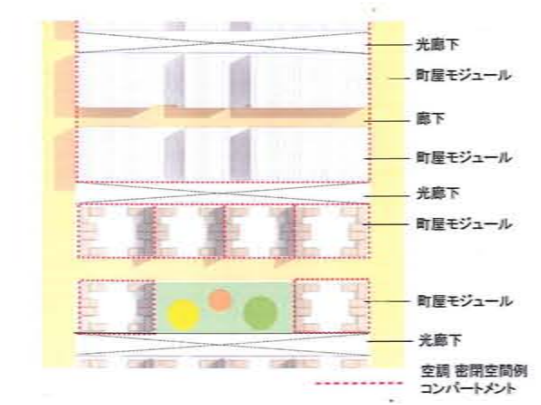


ざわざわスペースを中心とした1階のプランニング。

町屋モジュールの展開。



町屋のグリッドは、単純明快なゾーニング、機能的なコア配置、動線を与える。同時に、これはモジュールによる合理化であり、レイアウトの変更にもフレキシブルに対応可能である。



配置図兼1階平面図 1:500



光、光だまりと影。



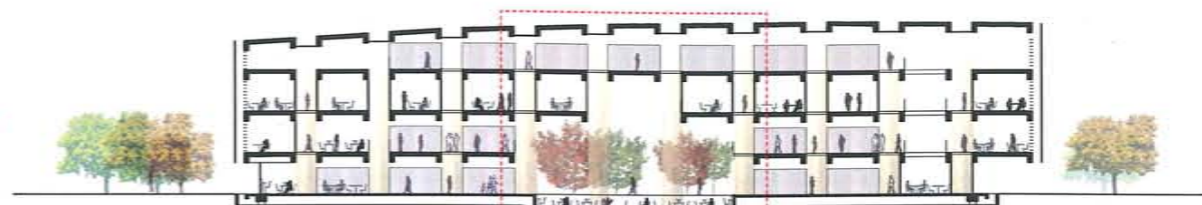
路地、坪庭と書庫。

縦の光

薄暗い場所・明るい場所。。。光と影。
自然光は屋上の路地空間や1階周囲のガラスファサードから。
路地空間を反射して太陽光は書架に優しい間接光となる。
路地と小路の交差点で何かがおこる。
低い場所と高い場所、
路地のように狭い空間。

4

シンプルな坪庭に対し、高さを調整することで多彩な空間を生み出す。



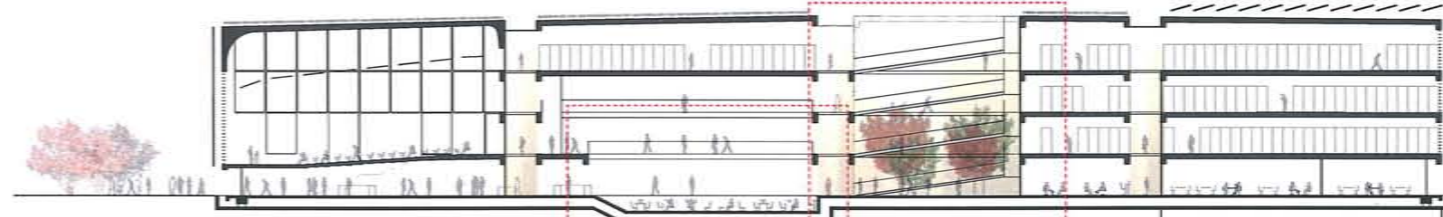
図書館エントランスエリアと隣接したざわざわ閲覧エリア

東西方向断面 1:500



横の光

エントランスーざわざわエリアー中庭のつながり



サンクンスペースのざわざわ閲覧エリア

コートヤード

南北方向断面 1:500



閲覧エリアと書庫の関係性



光だまりの中庭。それを取り囲む京都の歴史。

内と外を繋ぐ。自然と建築を結ぶ。



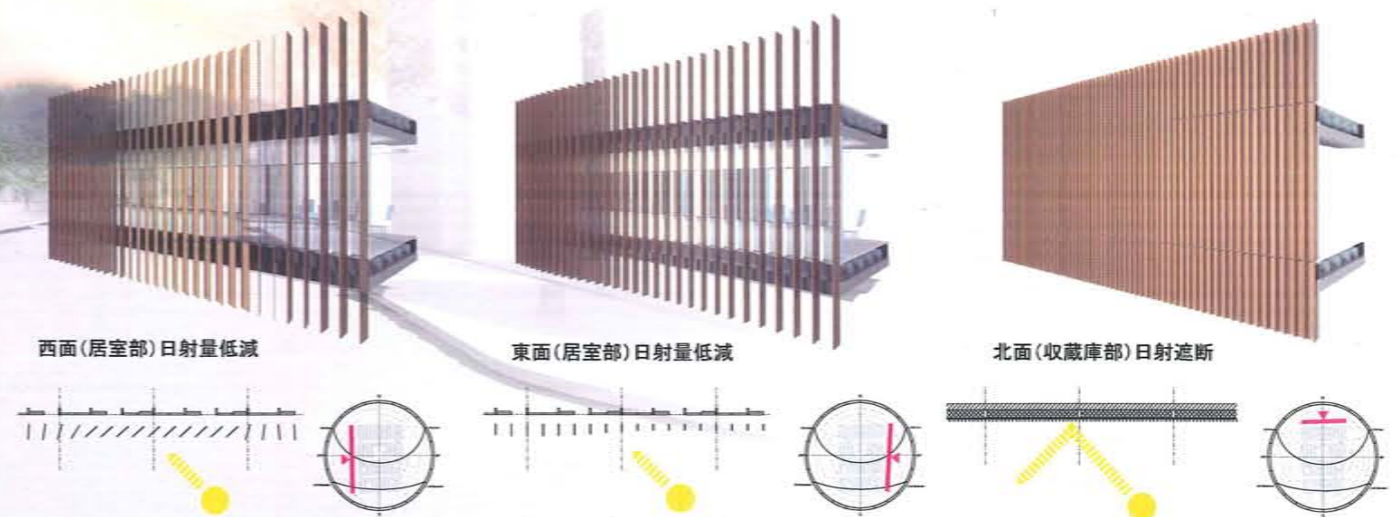
南立面 1:500



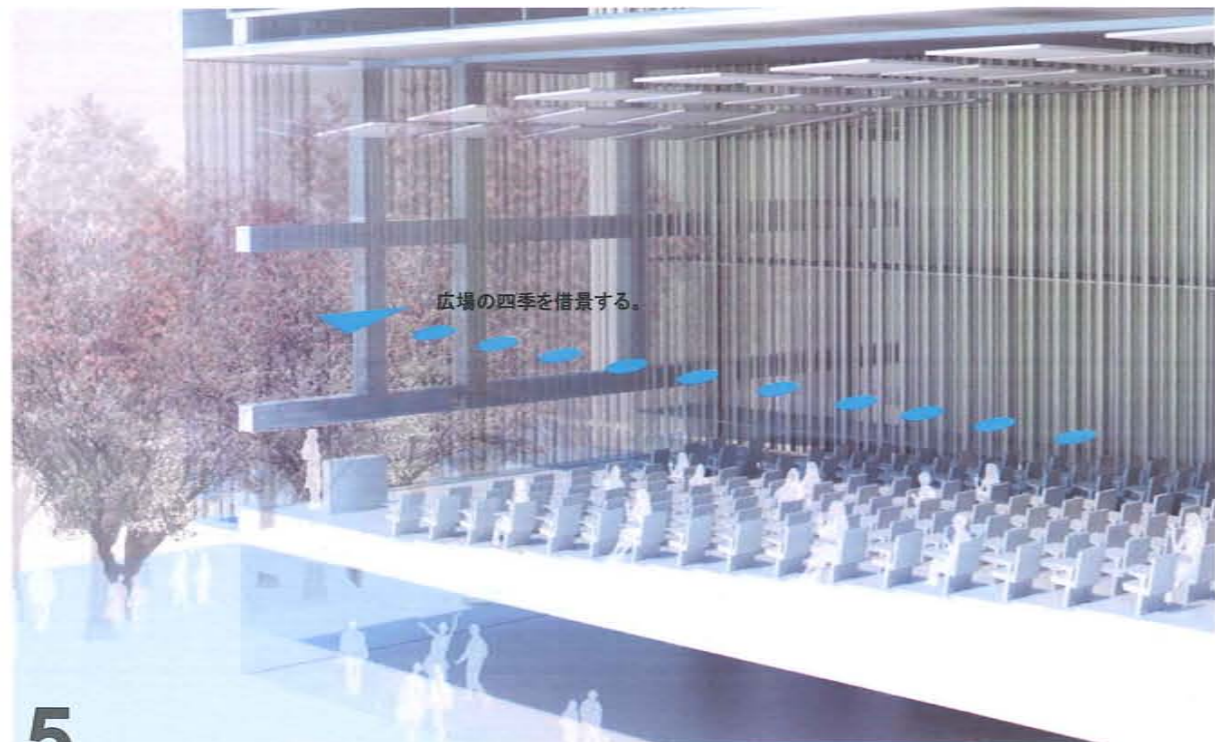
東立面 1:500

建物に入るとき、中にいるとき、四季を感じられること。
 春満開の桜の甘い香り。
 夏のそよ風に揺られる木々や葉のざわめき。
 秋色とどりの紅葉。
 冬中庭に深々と降り積もる粉雪。

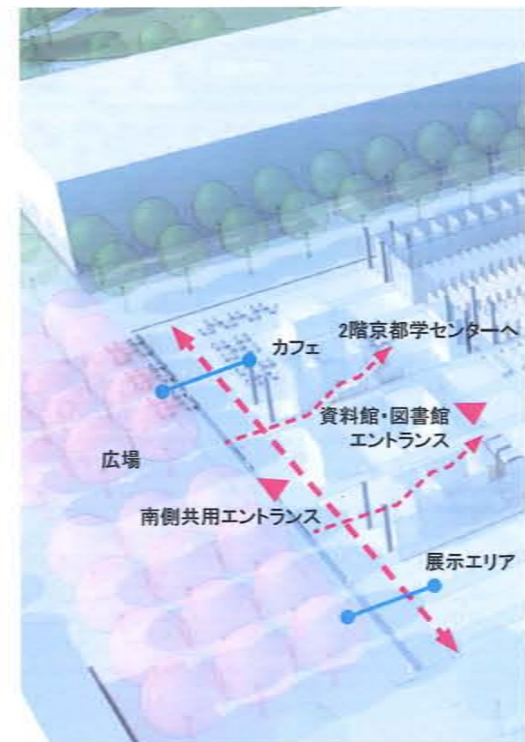
初めての訪問者は、ただホールに講義を聞きに来るだけかもしれない。研究者は半年あるいはそれ以上にここに留まるかもしれない。スタッフはまるで住んでいるかのように何年もここに滞在するかもしれない。それぞれ違った経験をこの建物で得るだろう。この建物はそのような通った感情を喚起させるものでなくてはならない。



内部機能に対応したファサードルーバーのスタディ



公開講座用ホール

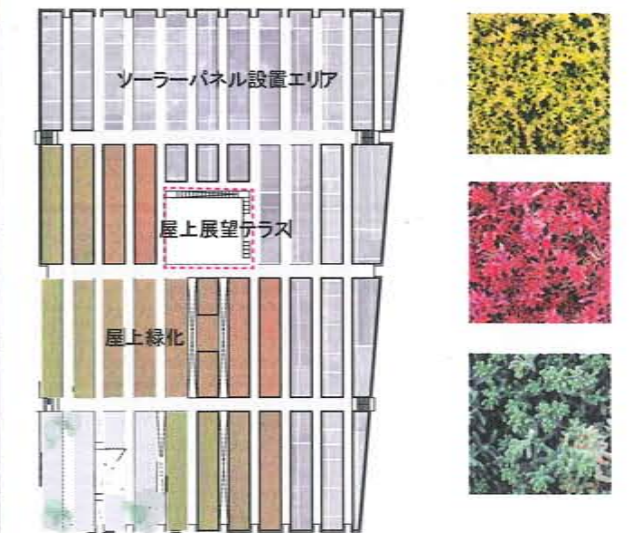
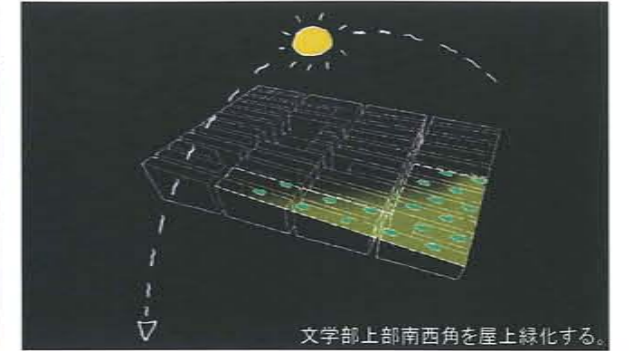


桜並木を借景とした南側パブリックゾーン

環境と装置。それらが様々な場所をつくる。



宙に持ち上げられたボリューム群により、1階内部空間はそれだけで十分な日除けを得ることができる。ボリューム自身は地場産木材で包まれ、FCUでボリューム毎に空調される。収蔵庫部は完全に密閉された空調空間となり、居室部はルーバーで覆うことで日射量を低減する。屋上緑化は、収蔵庫に影響しないよう文学部連携スペース上部のみに展開し、内部の熱負荷削減に貢献する。路地や坪庭空間がかつて町屋にとって合理的な通風システムであったように、この施設においても、それらの煙突効果を利用して自然給排気を促進する。床下チャンバーを利用した床浸し空調は、とりわけ冬の寒さの厳しい京都において有効な暖房システムである。



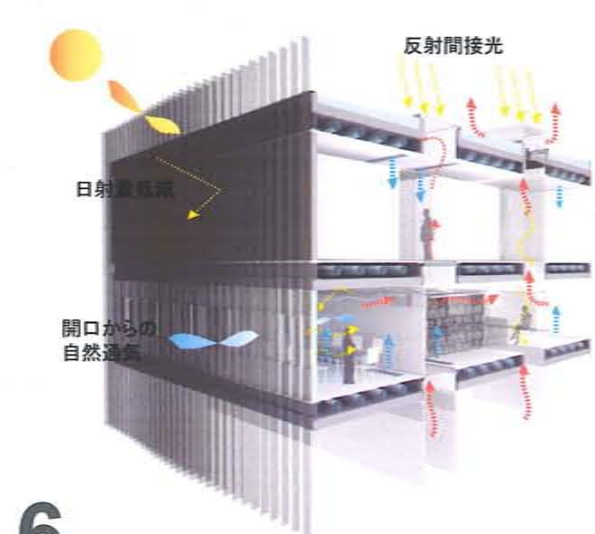
屋根伏図



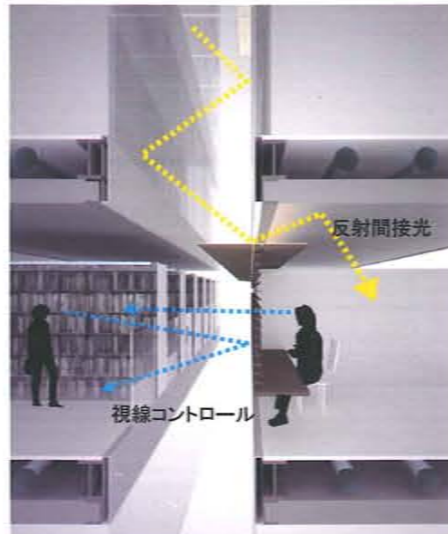
ソーラーパネルを取り込んだデザイン/装置としての木材

学習エリアのタイプは、個人かグループか、ざわさわが静寂か、瞑想か議論か。耽る場所と喋る場所。自分自身を見つめる場所、みんなが見える場所。

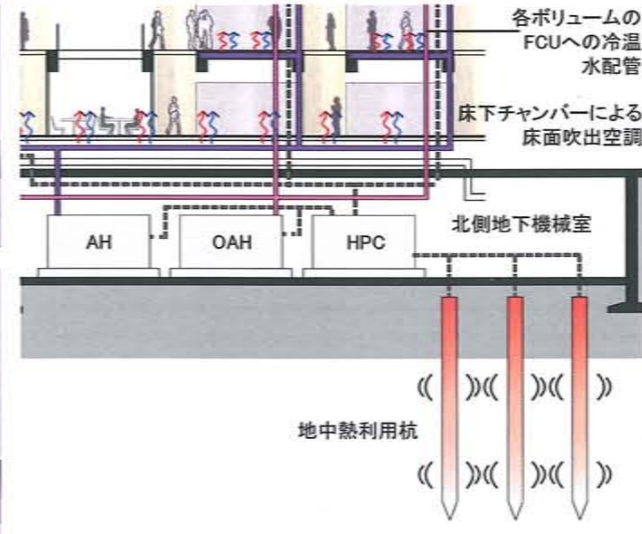
環境に応じた様々なスペース



ソーラーパワーによると弱電ファン



個室・研究室への配慮



空調設備ダイアグラム



地上の植栽と、屋上緑化庭園にて四季を彩る。